

# 世界一のリゾートが浦添西海岸で実現可能だ ～そろそろトップを目指そうじゃないか～

渡久地 明

沖縄観光速報社 編集長  
TOGUCHI Akira

## 1. 2500万人受け入れ体制の充実・拡大を

昨年の沖縄観光客数は940万人となり、これまで手本にしてきたハワイの938万人を追い抜いた。今年の沖縄は1000万人を達成する可能性もある。県は「沖縄観光は世界水準を目指す」としているが、そろそろ「世界のトップを目指す」としてはどうか。筆者は沖縄観光はハワイの例から2500万人まで行けると見込んでおり、そのためにはもう一段の受入体制の充実・拡大が必要だと考える。その方策の一例を以下に示したい。

## 2. 世界の観光産業が伸びた要因と今後

これまで「今後も伸びる、沖縄観光成長の法則」(「しまたてい」No.73、2015年7月)、「世界180ヶ国中、上位占める沖縄観光」(同No.75、2016年1月)、「世界の観光予測法を沖縄に適用する」(同No.81、2017年7月)で筆者は観光客数は受入上限に向かってロジスティック方程式にそって伸びるはずだと主張した。UNWTOのデータから世界各国が沖縄同様に成長していることを指摘した。世界の180ヶ国あまりの観光データからは、戦争などに巻き込まれない限り、ほとんどの国で到着観光客数は伸びている。また、UNWTOは「観光予測法の手引き」という書籍で十数通りの観光予測法を説明し、過去のトレンドを外挿する単純な予測法が最も当てはまりが良いとっており、その内容も紹介した。

本稿ではこれらに新たな知見を3つ追加する。一つはデービッド・アトキンソン氏が主張して日本の観光政策に取り入れられるようになった観光地が伸びる4条件だ。

二つ目は「観光予測法の手引き」にある世界の観光行動の観察例から目的地の吸引要因、発地の押し出し要因、発地と目的地の間の摩擦要因だ。

三つ目は観光客数が受入上限に達したと見え



写真-1 浦添西海岸と臨港道路浦添線・浦添北道路

た後でも、適切に受入体制を増やせば観光客数はもっと増やせるというハワイの例だ。数式ではロジスティック方程式の上限がある時点から拡大したとして計算したところ、ハワイの最近の動向とよくフィットする結果を得た(グラフ-1)。

これらを見た上で1000万人達成後の沖縄観光には浦添市で返還予定のキャンプキンザーを中心にリゾート用地の整備を進め、世界のトップを目指すべきだと主張する。

デービッド・アトキンソン氏が『新・観光立国論』(東洋経済、2015年)で主張した観光立国の4条件は「気候」「自然」「文化」「食事」である。日本はこの4条件がそろった希有な国であり、観光の推進を強力に主張した。同氏は2016年2月に那覇で講演し、著書では明記していなかった4条件の出所は、ロンドン大学、コーネル大学など欧米の観光のトップの大学の長年の研究成果であると述べている(「観光とけいざい」第917号、2016年3月15日付)。

アトキンソン氏は明日の日本を支える観光ビジョン構想会議の委員となっており、政府は「明日の日本を支える観光ビジョン」(2016年3月策定)でこの考えを充分取り入れている。観光立

国の4条件は間違いなく沖縄も満たしている。

ビジョンでは2015年の訪日外国人客実績1974万人、旅行消費額3兆4771億円をジャンプ台に、2020年に4000万人・8兆円、2030年は6000万人・15兆円にするとしている。

もう一つのUNWTOが「観光予測法の手引き」で示した観光のプラス・マイナスの要因とは、以下の3点である。

- 1) プッシュファクター=発地の人口、所得、教育、年齢分布、余暇時間、家族構成、天候
- 2) プルファクター=受け地にいる親戚・知人、目的地の気候、商業的結びつき、社会的/文化的つながり、マーケティング、イベント、趣味
- 3) 障壁=旅行価格、競合地の働きかけ、距離・旅行時間、隠れた税や空港使用料、安全に関する脅威

UNWTOの吸引・押し出し・障壁の3要因のうち沖縄側で対応できるのは吸引要因であり、障壁要因はできるだけ取り除くべきであろう。押し出し要因は発地の経済成長を支援する話になるが、これは日本政府の開発支援などであり、沖縄側の政策としてはなかなか手が出せないだろう。しかし、押し出し要因は世界経済の成長に応じて、拡大していくから、今後、プロモーションなどで様々に働きかけていく必要が出てくるだろう。

### 3. 充実した沖縄のインフラと受入体制

1000万人達成が目前となるまで、沖縄を取り巻く環境は大きく変化した。社会資本が充実し、那覇空港は2本目の滑走路を建設中である。1000万人観光客の受入には水が不足するといわれたが、沖縄のダム開発はほぼ終了した。「年中行事」のようにになっていた断水・給水制限は1995年以降、全くなかった。道路ネットワークが充実、クルーズ専用バースが那覇にでき、宮古・石垣・本部・中城湾港にもクルーズ船が寄港するようになり、さらに岸壁の延長やターミナルなどが整備されつつある。それらの変化のすべては観光産業の立場から見ると1000万人体制を後押しするインフラ整備であった。イン

フラ整備は観光産業への投資家の注目を集め、実際の投資を促進した。インフラ整備と観光の相乗効果がハッキリ見えるようになってきた。相乗効果や相互作用の効き方は次のようなプロセスだった。

増えた客室を日本の中小・大手の旅行業者が存分に販売し、自らも成長した。航空会社は強力なプロモーションを展開し、需要を創出、旅客数を増やし、観光地も航空会社自体も成長した。

観光客が増えることで受入側の観光施設、伝統工芸や食品類など土産品、芸能などエンターテインメント、食事、移動手段など様々な事業が強化・拡大され、品質を高めて受入体制が整ってきた。沖縄観光の成長の仕組みはこれが骨組みである。

いま述べたことは沖縄に限らず、他の国内・海外の観光地でも通用すると思われる。

### 4. 沖縄県は2021年に1200万人と上方修正

沖縄県は2021年の観光客目標1000万人を2017年3月、第5次沖縄県観光振興計画の中間見直しで1200万人と上方修正した。OCVBは2030年の観光客数が1742万人となるとの長期予想を公表している。

筆者もこのような伸びは可能であり、ハワイの例から2500万人前後まではいけるのではないかと述べた。年間観光客数の上限を決めるのは受入体制だが、県内は今後も返還軍用地などの開発が進み、人口規模がほぼ同じであるハワイ並みの受入が充分可能だと考えるからだ。

沖縄の観光客数は2017年に940万人とハワイの938万人を初めて上回った。もっとも、ハワイは観光客の平均滞在日数が約9日間と沖縄の約3.6日の2～3倍あり、人×日ベースで沖縄の2～3倍の規模となっている。

沖縄の滞在日数が現状のままだと観光客を受け入れる能力はハワイ並みだとして2500万人との計算だ。この達成には今後、ワイキキ並みの大がかりな開発が必要になると予想される。

### 5. 浦添西海岸のポテンシャル

このような受入体制を整備するにはワイキキなどに見られるゾーンを設定して高層の建物を

中心としたリゾートタウン方式での開発が適していると考えられる。このようなリゾートはマイアミ、オーストラリアのゴールドコースト、バリ島、プーケットなどアジアでも大規模に進められ成功している。従来のワンビーチ、ワンホテルはぜいたくな超高級リゾートに位置づけられるだろう。

沖縄県も1990年頃トロピカルリゾート構想を打ち出し、ハワイ・ゴールドコースト・オキナワを結ぶリゾートのゴールドトライアングルを主張したことがあった。当時は大きすぎて驚くほどの構想だったが、それから30年経過するなかで、当時ほどのビックリ感はなくなってきた。

筆者はハワイが1990～2005年頃まで観光客が伸び悩んだ理由をワイキキの開発が完了し、客室が増えなくなったことが大きな要因であると述べた。観光客が勢いよく伸び、ある時期から伸び悩む様子はロジスティック方程式で表されるところとして、方程式の解と実際の観光客数がよくフィットしていると述べた(「しまたてい」No.73)。観光客数は受入容量であるホテル客室数を埋めるまで伸びるが、それ以降は頭打ちとなる。実際にハワイに行ってみると、ホテルはどこも満杯で室料も賃金も上昇しているという様子を見た。

1990年代半ばから第2ワイキキを造ろうという計画が持ち上がり、4つの人工ビーチを備えた大規模な開発がコオリナ地区で始まる。2005年頃からホテルができはじめ、2009年にディズニーランドのホテルが開業すると、ハワイの受

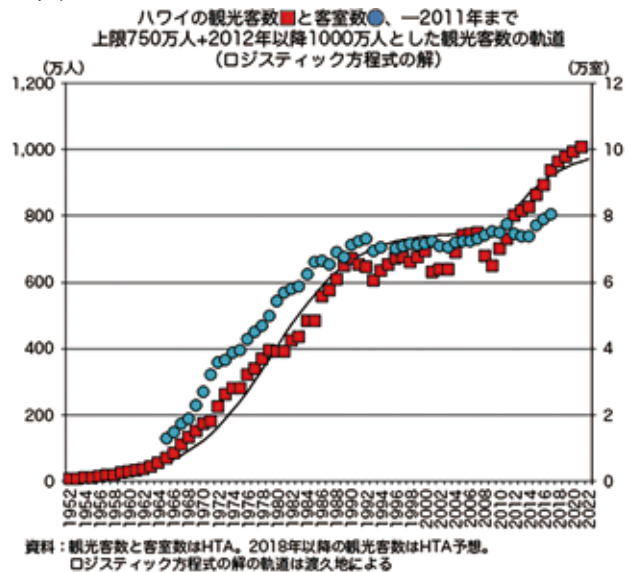


写真-2 ワイキキ (Google Earth)

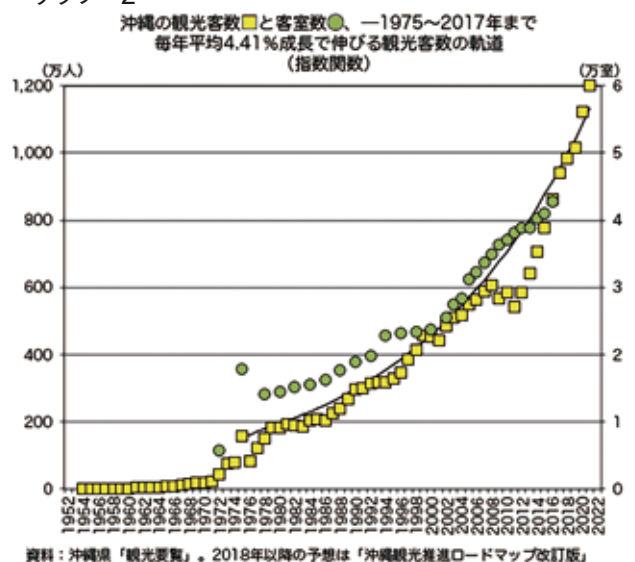


写真-3 浦添西海岸 (Google Earth)

グラフ-1



グラフ-2



入体制が充実した。

ハワイと沖縄観光の長期的推移を比較しよう。グラフ-1、-2に観光客数と客室数を示した。ハワイの細い線は観光客数がロジスティック方程式で示されるとし、その解の軌道だ。観光客数はワイキキの受入体制が整った後は上限のおよそ750万人に近づくように伸びた。沖縄はまだまだ上限に届かず、観光客は指数関数で増えている。

ハワイも沖縄もリーマンショックで観光客数が落ち込み、ハワイのいくつかの有力ホテルは全館改修などの工事に入って客室が縮小することもあったが、2010年頃には新たなホテルも開業、再び観光客は新たな上限に向かって急増し、2017年には900万人を突破、2021年には1000万

人を超えると州当局は予想している。この様子は2010年頃に客室数の上限が拡大したとしてロジスティック曲線を計算し直した軌道とよくフィットする。沖縄の客室が上限に達した場合でも、必要なら新たな開発で再び拡大できると分かる。

沖縄はいま、人手不足が取り沙汰されているが、やはりワイキキのコンドミニウムなどにヒントがあるだろう。ハワイの客室は約7.9万室だが、ホテルは4.4万室、客室の提供に特化して、フルサービスホテルに比べてほとんどサービス要員がいないコンドホテルが1.1万室、タイムシェアが1.1万室、パッケージ・レンタルが1.2万室、その他0.1万室となっている。だが、ホテル、レストランのオーナーは満足している。失業率もリーマンショック前の2007年に2.6%前後と全米最低水準となって、その後、2009年には7%台前半まで上昇したが、再び縮小して2018年1月には2%台に戻っている。

沖縄是那覇空港第二滑走路の建設で、1990年代のハワイのような横ばいは回避されよう。滑走路増設後は第2ターミナルの必要性も経済界が指摘している。

## 6. 世界一を目指そう

観光客2500万人、世界一の観光地に向けて最有力な場所が浦添市の西海岸一帯だ。復帰前に世界最大の海運会社・米国NBC社の船に乗り組んだ船員らの集まりである沖縄NBC会は1980年代半ばにNBC社を動かして、浦添市西海岸沖を埋め立ててクイーンエリザベス号が横付けできる岸壁とゴルフ場、2000室の高層ホテルを建設しようという企画を打ち出した。当時の比嘉昇浦添市長は沖縄NBC会の徳村直栄氏とニューヨークのNBC本社を訪問し、ラドウィック会長から直接、進出したいという意向を聞いた。2000室のホテル建設は沖縄観光へインパクトが大きすぎるとして警戒する声もあった。また、浦添西海岸は当時も那覇軍港の移転先との構想があったようで、比嘉市長は結局、ニューヨーク訪問から1年経っても計画にゴーサインを出すことができず、時間切れとなった。その後、ラドウィック会長も比嘉市長も亡くなった。だ



写真-4 モルジブの水上コテージ

がいま、2000室のホテルは夢物語ではなくなり、クイーンエリザベス号も実際に那覇に寄港するようになった。キャンプキンザーは返還が予定され、那覇軍港の移設も焦点だ。

沖縄の観光産業はいま、間違いなく世界トップを実現できるところまで成長した。その舞台として最も有望なのが浦添西海岸だ(写真-1)。浦添市、宜野湾市、那覇市などから労働力の確保も可能だとみる。

グーグルアースでワイキキと浦添市西海岸をほぼ同じ縮尺で比較したのが前ページの写真-2、-3である。浦添市西海岸は新しい道路が開通したばかりである。キャンプキンザーは返還が予定され、港湾の埋め立てが計画されている。ここには世界トップ級の観光ゾーンであるワイキキをスッポリ収容する広さがある。

ビーチは黒潮に砂が持って行かれないよう南向きがよい。埋め立てた陸域には運河を巡らせ、海水を引くとビーチ沿いの環境を増やせる。モルジブなどで人気の水上コテージ(写真-4)がこの運河沿いに実現するだろう。台風の影響や開発に制限があってできなかった新たな形態のリゾートホテルが実現する。この背景に高層ホテルの建設も可能だろう。

さらに、近くの沖縄電力の発電施設から出る廃熱を再利用し、12～3月に地域全体を暖めると冬でも裸でいられるビーチができる。年中楽しめるリゾート施設が集積すると、賑わいが賑わいを呼び、新たなビジネスが生まれ、持続的な発展が可能となるであろう。浦添西海岸道路を車で走ると世界一のリゾート開発が目に見えてくる。